

令和3年度 発掘調査 ここに注目

令和3年度は主に大門遺跡の南端部分の発掘調査を行った結果、弥生時代の竪穴住居の跡や、古墳時代の掘立柱建物の跡、中近世の溝の跡などが見つかりました。その中でも特徴的な出土遺物や遺構を紹介します。

せきぞく 石鏃

石鏃がこれまでに3点出土しています。石鏃とは弓矢の先端につける石製の鏃のことで、ガラス質の石を鹿の角などの固いもので少しづつはがして作ります。

長さ2.7cmの小さい五角形の石鏃は縄文時代後期頃のもので、大門遺跡と同じ丘陵上にある長者平遺跡(豊沢)の住人が狩りに田端まで来て落としていったものが混ざったのかもしれませんが。

長さ5.5cmを超える大きい鏃は弥生時代のもので、弥生土器の破片と一緒に出土しました。大きな鏃は弓矢としての使用は難しいため、マツリでの利用が考えられます。



表紙の写真のところで
見つかりました。



大きな溝

調査区を南北に分断する大きな溝。発掘した部分だけでも幅約6m、長さ約10mありました。区画のための溝と推測されますが、今後周辺の調査が進めば、溝の全体像や周囲の建物との関連が明らかになると期待されます。



これはなんでしょう

左右に生えた手。これは甗と呼ばれる古墳時代の蒸し器の一部です。甗の底には穴が空いていて、水の入った甕とセットで使われました。形は違っていても、既に現在と同じ方法で調理をしていたことが分かります。



土器が元の姿に戻るまで PART 2

土器の破片を洗って綺麗にしたら、元の形に組み立てていきます。バラバラになった破片の中から隣同士のくつつくものを探しています。土器の色や厚さ、文様、土器を作った時のヘラやハケの道具のあとなどをヒントに、似ている破片を集めていきます。手で似ている破片同士を合わせてみて、割れ目や文様がピッタリ合えば正解です。この作業を繰り返すと、ひとつの破片だったものが壺や甕といった元の形へと近づいていきます。

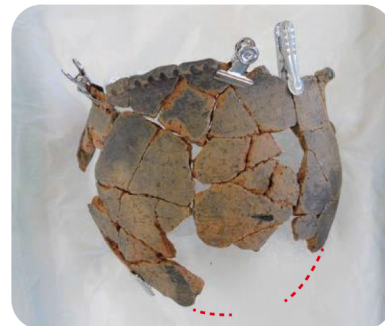


色や厚みが似ている
から同じ土器かも?!

くつつけると...



全ての破片は見つから
なかったけれど、
おおよそ元の形に。



次回へつづく

令和3年度

大門遺跡 田端地区 発掘調査

袋井駅南都市拠点土地区画整理事業に伴う大門遺跡の発掘調査が平成30年より行われています。令和3年度までに全体の約1/3にあたる約13,000㎡の発掘調査が終了し、弥生時代、古墳時代、奈良・平安時代、鎌倉時代などの住居の跡などが発見されました。

そのなかでも、弥生時代の遺構(土にのこる生活の痕跡)や遺物(土器や石器など、当時の人が使ったもの)は質量とも多く、弥生土器や銅鐸形土製品をはじめ様々なものが出土しています。

今回は、大門遺跡や市内の遺跡で発見された遺構や遺物を紹介しながら、弥生時代はどんな時代だったのかをご紹介します。



弥生時代っていつ？

弥生時代とは、今から約2,400～1,700年前の時代の名称です。「弥生」という名称は、東京・弥生町の遺跡から出土した土器の名前に由来します。約2,400年前に大陸から伝わった稲作の技術が北部九州に伝わり、九州地方において稲作が始まると、中国地方・関西地方・東海地方へと次第に東へ伝わっていきました。

新しい生活様式

稲作が伝わったことによって、人々の生活様式は大きく変わります。安定して食糧が得られるようになったことで、人々は大きな集落を形成するようになり、田植えに適した低地の湿地帯に生活の拠点を移します。縄文時代までの狩猟採集を行いながら季節で住処を変える生活から、通年で同じ場所にとどまって農耕を行う、定住生活へと変わっていきました。

太田川流域の広い平野は豊富な水源をもち、稲作に非常に適していたため、あちこちで集落が造られ始めました。大門遺跡から出土する土器を調べると、田端に人が住み始めたのもこの頃であったと考えられます。低地を見下ろす小笠丘陵の先端部で大門遺跡、掛之上遺跡、愛野向山遺跡などが見つかっています。



年 表	
明治時代～	安土桃山時代 500年前 —
江戸時代	
室町時代	
鎌倉時代 ★	1000年前 A.D.1000年 —
平安時代	
奈良時代 ★	
飛鳥時代	1500年前 —
古墳時代 ★	
	2000年前 A.D.1年 —
弥生時代 ★	
	2500年前 —
	3000年前 B.C.1000年 —
縄文時代 ★	

★・・・大門遺跡に関する時代

弥生時代の暮らし

住居

地面を丸く掘りくぼめて作る^{たてあなじゅうきよ}竪穴住居の跡や、床を地面よりも少し高く作る^{ほったてはしらたてもの}掘立柱建物の跡などが見つかっています。建物の中央が赤く焼けていることがあり、煮炊きをした炉の跡だと考えられます。

袋井インターチェンジの近くにある堀越ジョウヤマ遺跡では、はしがが出土したことから、高床式倉庫があったと考えられています。高床式倉庫とは床を地面から高い所につくる倉庫で、食料をカビやネズミ、害虫から守るために工夫していたようです。

■掘立柱建物
(伊場遺跡(浜松市)・復元)

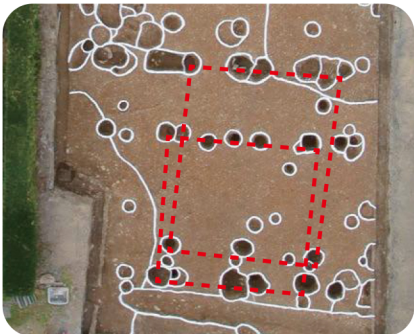


■竪穴住居
(登呂遺跡(静岡市)・復元)



■竪穴住居の跡

■掘立柱建物の跡



■高床式倉庫
(登呂遺跡(静岡市)・復元)



■はしが(堀越
ジョウヤマ遺跡)



木材の伐採、加工

建物や暮らしの道具の主たる材料は木材です。大門遺跡の人たちも、斧を使って木の伐採や加工が行ったようです。弥生時代の後半には、一般的には鉄製の斧が使われ始めますが、大門遺跡では一部で石の斧も使用していました。木の伐採に使う大きいものから、表面の仕上げや成形に使う幅約2cmの小さいものまであり、使い分けられていたことが分かります。



■磨製石斧と石斧・柄のレプリカ

農耕

遺跡が使われていた当時、使用されていたと考えられる木製の道具については、腐ってしまいなかなか現在まで残らないものですが、低地の遺跡では水や泥に浸かった状態で運よく残ることがあります。

堀越ジョウヤマ遺跡からは、稲作で使われたと考えられる木製の^{くわ}鍬や^{すき}鋤などの農具が見つかっています。ほぼ完全な形の鋤は現在でも使えそうです。



■鋤(堀越ジョウヤマ遺跡)

土器づくり

食べ物の保存や調理、盛り付けに使う土器は普段の暮らしに欠かせないもので、大門遺跡からも大量の土器が出土しています。土器の作り方や形・文様は、時期や地域によって特徴が異なります。大門遺跡から出土する弥生土器は、時期によって大きく3種類に分けられます。

①嶺田式土器(弥生時代中期)

大門遺跡に最初に住み始めた人たちが使っていたと推測されるもの。壺は丸や横線などの文様が入られ、赤く塗られています。



②白岩式土器(弥生時代中期)

壺の上半身が細くて、下半身が膨らんでいることが特徴。ヘラを使って横線や波線を描いたり、三角模様を描いたり、一番文様が豊か。



③菊川式土器(弥生時代後期)

弥生時代の終わりごろの土器。羽状文(“ハ”の字を組み合わせたような文様)が大人気で、様々な所に描かれている。

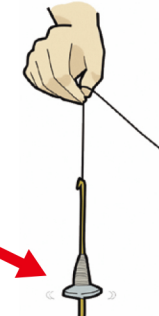
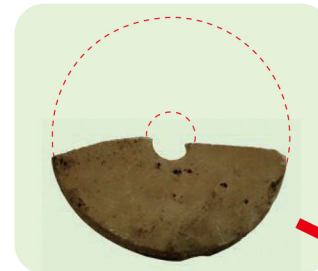


大門遺跡では①嶺田式→②白岩式→③菊川式の順に出土する土器の量が増える傾向があります。弥生時代の後半にかけてだんだんムラが大きくなっていったのかもしれませんが。

衣

大門遺跡では石製の^{ほうすいしや}紡錘車が1点出土しています。これは糸を紡ぐ道具で、糸から^{はたおり}機織機で布を織り、それから衣服を作っていたと考えられます。

■紡錘車



マツリ

これまで紹介してきた実用的な道具に当てはまらないものもあります。大門遺跡から出土した銅鐸形土製品もそのひとつで、マツリに使われたと考えられています。他にも掛之上遺跡からは銅鐸の破片が、^{あいのむかいやまに}愛野向山Ⅱ遺跡からは小銅鐸が出土しており、銅鐸に関連するものが高尾から愛野に集中しています。



■銅鐸形土製品

■小銅鐸(愛野向山Ⅱ遺跡)

■銅鐸の破片
(掛之上遺跡)

■銅鐸(複製)